

巴園

明治十三年購求

第...
 流くまは... 國中... 瑞相多...
 ...は...
 ...は漢乃皇帝...
 ...

巴園と云ふ所有は隣家より年々...

飛きて技園と号者も地よそ
じ乃古来の中よ奇物故来の實
出来中奏園中する。急技園
けびのみとくくまい道この宣
者と急。只今もえんよ急作
あふきてくもねその人ある此君
のたぐくみあまねもはははは

四四

四四

吹にさゆりて雲煙の花を紅葉
色も色や入て盛久しき年と板
はあし乃林よまふをりく
そふいねおとえんよまてい兼
及そあよるよ色ましくなる園
していそや志もしく此所も
技老人乃在而たたい孫と也と

是らるる夫婦の者が字及を所をえ
じの由も所老人のそあつた^三式
じは是六年久しく此くえんは恒
て本中とまじむ所者うりぞそ
くくハ所門あり乃勅使よそ
志まとう^早やくも是知所
し乃物相もくえんのいれよの夏
老人奏すナリよるを見て由れ
との宣旨と家づく所くはまそ
ましりて先技本のみが現のいそ
まづくくわらうとそ由入るし
概^キい^キう^キ一^キ中^キなくそ所門乃勅使
しよ^キも^キじ^キ事^キ。一^キ百^キ余^キ歳^キの^キ星^キお

と送けがよ巴えんよ年久しき楯
乃灵来るを枝来よ芝雲棚引
れり事。七日七夜あり其後
小鳥きこるる。さへはる色もよ
つぬきも ニヤル けりひんくもくや
さくりり。香妙なる小鳥此雲よ
入く見えし後公も樂虚をよ

響つていさやうんして日も昔ぬ
物よきて是て人れはふり物
日のさく一内よ余る楯の色香
妙なる帝世の本此を非爰奇
物乃灵来り 早 いとれとやえ
有くくや カ けり カ けり カ けり
同出度御代の瑞相あり

じの内よ盡ても命の
やん 伊道より人
そ入りて 勞人
もひて 深けは
下道 露 志 け 青 万
篋力 林 櫛
の花 此 面 叙 疎 しく きて 楊 梅 桃

李 紅 葉 残 詠 又 帝
盤 石 入 ぬ ぐ せ さん ち 人
く 心 ち ち り ち 緑 ち ち ち 中
満 月 力 心 の ち ち ち 光
やく 橋 の ち ち ち ち ち ち ち
志 しく ち ち ち ち ち ち ち ち
いや 形 及 ち ち ち ち ち ち ち

そらきちりさのちりさせ あ い ま む
くわろくはる 上 右 左 中 下 東 西 南 北
きくく と り く も も 事 草 あ よ
つと す の い と と 見 せ 花 実 数 七
さ ゆ く く よ 賢 王 の 事 と ひ の
ま ち り り 武 進 も 仙 家 の 花 実 よ
と ま つ て も 王 母 の 枕 実 を ん は は

ふし 東 名 西 の 粟 込 七 れ さ ゆ の 代
の た み と か ら 唐 の 世 の 所 口 君
長 よ 橋 實 と く し を ま ひ し 事
か そ を か 君 が み と や あ ハ
も え ん の 橋 の び と 今 も を あ
か か き 世 花 の ち を の 道
菜 宮 と や も は よ の 見 よ

こわしやちやふり年ゆ松乃
くもていもいにく十のりりも
じ露をくく向枝をれて藪乃
暮よ流ゆるあよとじ電送も緑
毛のくそやとゆ^上尉^上拙久
あかれや月んせがをいりそ
も家ひやうよくこやん仙の水

ふなへんはぬうちくも
やと孫くもまひもものあうみ
はあま向橋乃。仙卿よむを地し
てぬももあももも詠よあぬ
公^上物^上是^上送^上されや老人よ
ぬて我君よ奏すせんせりれき
知^上金^上くく向^上せぬるやん

ク月^ノ橋^ノの^みり^のあ^らね^て耕^す
使^よ由^りを^かか^しむ^べ城^もや^やを^ま
冥^冥の^月は^妙介^りあ^らす^とち^あり^や
や^いぬ^る染^りや^今ハ^えす^ま
あ^らね^て深^い月^は物^の心^のあ^らね^て
夕^月は^くも^を升^り 紅葉^{の本}
陰^よも^らた^まし^とや^すら^る美^人

と^いさ^んと^さし^てい^しゆ^のあ^らね^て
み^とも^とり^しれ^んよ^いま^いま^いま^い
す^りや^もち^の舞^楽と^奏し^ぬく^も
ま^婦も^もち^のひ^りも^もち^の林^のれ^い
く^よ入^ふり^く 青^のり^やく^も
ゆ^めを^かか^し君^よの^心の^あら^ねて
み^りの^あら^ねて^すみ^とり^しれ^ん

よきいんまやうしうくわうく
しやうやまやうあまんく桃
青の月乃珠とて紅まは
くまきかまのみとよりまよく
くみん人よりあつねんあ
うの壺乃菫とくまうの酒と
や今ハもや神よつぬわ橋ん

美と命のつせくわ青共付老人
まらま地よづく橋美よひ
たしひなくも玉地よけかう本
としてかまう宣言よまうさ
らんまやとくあまのまを
とねんまもまらまのまは
と仙人の楽よりくわんれおま

コト^{童子}上し 執使と稱し^まん^今此君と
あ^んん^と揚^実カ^仙卿^をや^うさん
カ^だの^しひ^よう^も志^じし^上れ^ん
ま^やう^{さん}の^をめ^ひと^まか^らま^う
れ^んけ^やめ^らむ^じや^い海^六
そ^とく^{えん}の^老人^をも^まひ^たま^へ
巴^圖の^老人^をも^まひ^たま^へ我^もも^こ

し^はな^いま^やう^字井^カ神^とあ^りて
ま^まや^常業^ニも^たら^ぬの^不死
カ^んく^もら^せと^トウ^今此^君よ^うし^を
そ^えま^のウ^下坊^のあ^をま^まら^う
執^使よ^しひ^をも^も。佛^法王^はけ^ん
天^地の^おと^く日^月カ^たれ^ん。松^はは^ら
昌^し玉^はは^らん^とつ^ちあ^りし^て。

ぬと見しし老人の杖は杖と
しりぞり神よえしあんとし
ひ。虚を。なくかと思へば
杖則ち龍と成てぞひ出する
しうがかりし。音。ま。終。
かひあらし。ひ。く。雲。青。橋。
の梢。の。り。ぞ。ん。り。ま。の。る。と

巻にやりて巻のり忽ち雲とれ
とと思へば。仲の仙人立ちる雲
よ折桑く。虚空よあられも
二人の童子と守護し雲と巻あけ
の跡と。勅使も。名。残。と。れ。し
尺。ま。の。け。と。由。妙。く。姿。を。ま。ま。の
ち。え。ぬ。跡。く。姿。を。ま。ま。の。ま。い

雲をいふけりく

實檢實盛

ひくやをいさみあはく馬の
そをいさしき義神此度本常義仲
ふよりり誓時とえておらる平家
とひりかえんと思ふ君のゐる
家の命とらんしどかみかり
ら追逐藤原の合戦より勝る

右条くこせし建共終よ右条をか
 及も頭とめて日本一の切の者
 と同字仕の 根ハ切成ける者武義
 仲么ハ長升の母友別當実威
 うと母也 又赤地の錦ノ直意ハ
 如何様平家の云道と思としく
 勝もかなくて 只一騎して色入くか

一ハ切を完切の神 是てと字
 了とゆじやる誠は是れ名とえそ
 内中にも妙成張當子の兵う
 今右条もと其名とを 朽せぬ
 跡よ妙志てうせいととらん念じ
 實良からんかしく 小中と志
 誠実威う頭していつ 樋尻二郎ハ

此の事なりとてさして侍せし
さあつて樋口よりなる今本とす
長ていふふは陣西の樋口の陣
西より入るに初して是れを
陣より急川系あれの侍事少と
長ていふふとて樋口の系といふ
とす(長ていふ方)の系(不)樋口

此なるのりなり太郎ささひのくせ者
こゝにて頻とこのり義仲公に
長井の弟藤判當實盛うと思
也。此の列し事をいへば是れ知て存
じ。殊に侍(長ていふ)のりなり
実盛うくひといふ(不)ゆきや
實盛う者なりは義仲と野とて

是の時ひんひけう白り志ういませ
跡白髪をうへきう付とてひんひけ
黒りせ かんいそは雲よ海てい
引とま雲よ深をふとたいふさ
じい我くひ古傳軍の事よてい
新よ美威きこ中ひ志六中し給
軍せとる若り原とあうそひて是

とけむとねとさけなほ又光武者と
て人くよあかつれんもは播るそ
びんひけと雲よ海わるも討死
せんとも中さくゆい志を海よ深
ていあかむいんやな弓取の身よか
らと新もううい有へん是く
あうやうせき 海とをえん立のけい

此の前の人々もあつたやうに
皆感激とあつたやうに
らてよのあつたやうに
考黙々とけいしん類もあつた
此のうひまんの恐る物と
まよはしたてでその情けを
公を思ふ付ても長めかやう

いふは樋口川前よふ由いふ

美盛の頃をうへにおもひの地
てあつてひて見へ長ていふ
川前の人々もあつたやうに
軍勢もあつたやうに
くとも陣もあつたやうに
樋口思やうに思ふ此本又を

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

やま実盛る其およしせし直
ひびれていそや一年平家大勝
東國よ向ひそりし時水多の羽
よおそものかりし是我身独のち
去よくと辨うあつんまりとてはげ
口惜き以才也哀ろくよそ今夜
の合戦よ討死し君と後代あへ

きとがせし言葉ハおいとて命と
うろ金かむらうちそあそれら
此者此ふいぬうひのせめ一陣よ
あふ孫共討別玉来乃年積光ハ
久も梅うえの其花笠の強よにま
みやひそるうえりひ乃錦たひえれ
毛そくひるまき家君ととれんそ其

出立とお月えそり 是は遠なるや
人くよみか陣くは攻也との
下知なれく其時よ今なる勝軍
く兵是志しけりも天下わんせ
じ乃をいめの水盃とくしりんと樋は
の以即水志やくよ 立まふ為の凡
と其舞 北 神といふは海よるや

いふ樋は洲前よ今ハ義仲ウ

へかすはとくぶらやく換も多々共
敵とわりなり世と治る人奴は是凡右
乃神 地 天下泰平。管人志をうらく
あはまの程の茶乃てや泰平樂と
くくハ 敵とわりなりと叙也 是凡志

やうらうらうらふや 或やとよめて
みやあよゆらまひ 日あよみや
よわつのも 泰平妙も 只は時よひ
をり多とあし有難やと 蘇仙めあ
くと退散やして 我中陣よえうり
ありく

上人流

はらじりあし ちをうり 水かき
こそうしと 旅の欠 我はくくく
と出方身れ 濁と余雨のふやん
し 栞是は去御口の院よつふな
海浜口の行はし こそ文是よ 密行所
あは 黒谷の法然上人と 尸て念

併乃約者として申しまするを
いづくも四字のそとてはな
まふ門の訃訟をうらまは
たれり或人配流せしむるとの
端をありきといぬ所供や
みろりの人と流飛しは若と
あつそむまき藤井元彦号

きば打鳥帽子とらせり
川舟よのせり只今たれのみと
急い 渡舟やみ川のみと
右のししとくも後か
月氣のぬきうらむの端
今日都路の名残を思ひつは
てあれり船の泊よまふりく

此は各事終り終り貴事上人此
 不ふつせぬひよあふ美し
 是は事及し法然と申善智識
 の心船つちのたとひしあぢら
 かりし思ふへあせ今換一押
 せん人そ 船よとる海士の
 らよいへて法よ運船の船
 世と清心と志れと船はくせく清
 船の跡の波と傳すたよりか
 於驚うあ人をうわしくてうれ
 りのぞくひもそる一押と
 かせやうを人よく 笑
 の舟下の中兼所引船んを
 若上船連といさうひあひてい

是ハあしひをもよほのまじり物

おん換の依ハくたうとの船商人

も舟よりハ 各是とぞあり

も情も慈悲はますへと人か

舟よ人いしひゆりけわの人

情有へまは更女人といしひ

も我もあはれの世と後習ひ

作とてとましあつてその

過去の縁やと ^{下年} おりけり

の身は消んとも白波よ舟と

うけ竿 ^い きて人の往來を

ひあり ^{上考} 去とてハの現より

もまひ ^ひ 其脚船よ

の ^い 上人の内意と

下二一
よまつし舟よきしてぬいり
ふい由やうのうとまにしめ
されへえそハクハ遊女よ
てまないて旅人の身よそハ色
分ぬお物せんらうら
まへへおハうらわは世ぬぬ
たぬいひじひはらうらわ

ともしひと共終よふ
とううやんよ朽じ事夕と
とぞれし命とらめく極る世
おん事とをのし終て
とんごう
上
主人家のありまぬ
う井屋の理とさうは北が
ひさうく八万葉も終よ死別
の石

ハシヨシヨシ 況んぬ不定のさ
ひ昨日八人のよとす今日ハワ
身も白藤の墨をあらふ公家
まゝあゝの身とまゝしてま
とあゝりかゝるのあゝぬま
まゝのまゝのまゝのまゝのま
まゝのまゝのまゝのまゝのま

い其まゝのまゝのまゝのま
うゝまゝのまゝのまゝのま
ひうたのまゝのまゝのま
まゝのまゝのまゝのま
若くすまゝのまゝのま
是枝とすてもまゝのま
鬼の身とせめてまゝのま

やちもつるめと葉の舟は竿を
さし月の光よ教とんてうたひ杭
一敷のらりはしりなすて上を
はへきか今生のまう秘んたり
ふへつハ弥陀佛のちを教かんやう
かひのまやうでけ也びりの息し
じりもをともと輪廻のまやとと
とをなれはたおとひしんよ秘んを
とけあうけ義感源とけり
とくつと也式てふすめてあう
あう有り秘のゆけうけやも滅り
是うう二世迄の寶をれ秘教
つやうめら女人の月念念佛
さくもびん珍なるをさよすも中

のま此人間をふえ物束ハ等々
へと殊更弥陀如来ハ罪業深き
众生と助給ソシとのこあら志四
乃中教也 扱ハ弥教也 緞火
よ入水よ入共只一向よ念佛せむ
はよ速給ソシ事 夫ハ
クハ

新も皆消カ南無阿弥陀佛此
ありらりらりて 有給ソシ此
歌とやまらりらりて 涙も業もみ
かまゆら南無阿弥陀佛乃らら
ひげまたの毛しやま給ソシ此
セハまらららららららららら
我えとひと切髪の本きやせし

おら七有程子神よあつて
押へてまし又しの舟は
心胸りしと深空を感海に皇
の衣とのしきりく夫を程や
諸佛よもも道諸佛よも捨
建らう人よもまけ給ふ弥陀他力
頼りしつゆ遊女と引道せん

月影を交り肉よ西の欠く
ひん乃雲のち返も弥陀来
時流れと思進も虚ろよ善樂
のぞきそいまやうんしつ
くはあつてまよきく
く浮世の橋とかさむし
ふよとをたあやうらじ身力

極くその故さかたまたま女のま
りへき^チ法^フり舟の^{フネ}ひかき
さ^カの^ヒし^カも^カし^カも^カし^カも^カ
か^カら^カら^カら^カら^カら^カら^カら^カ
お^オの^ノら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
お^オら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
の^ノ船^{フネ}も^モ竿^{ササ}も^モき^キ
て^テ目^メ前^{ゼン}も^モ東^{トウ}海^{カイ}も^モ
て^テ目^メ前^{ゼン}も^モ東^{トウ}海^{カイ}も^モ

下^シお^シる^ルや^ヤん^ン 休^ユし^シよ^ヨ夢^ムろ^ロあ^アる^ル存^{ゾン}

へ^ヘお^オの^ノら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ

あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ

あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ

あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ

あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ

あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ
あ^アら^ラま^マあ^アつ^ツつ^ツ

洲前^二の^一ふ^二の^一ふ^二と^一か^二と^一
て^二谷^一か^二く^一と^二て^一り^二し^一や^二り^一
有^二く^一や^二く^一伝^二ら^一ら^二ひ^一く^二を^一
な^二る^一も^二何^一所^二跡^一隨^二佛^一の^二姿^一乃^二
う^二ち^一よ^二ば^一辰^二よ^一ら^二浪^一乃^二共^一よ^二
や^二音^一樂^二の^一下^二ひ^一ら^二ら^一る^二か^一也^二
う^二の^一笛^二の^一音^二や^一う^二の^一太^二鼓^一秘^二し^一

ら^二ん^一く^二や^一う^二の^一故^二の^一流^二ら^一う^二
色^二く^一し^二を^一我^二小^一極^二楽^一也^二奇^一業^二也^一
さ^二は^一ら^二ま^一ら^二ふ^一と^二人^一と^二な^一く^二さ^一ら^二ん^一
と^二の^一く^二雲^一也^二し^一神^二と^一遊^二し^一く^二さ^一ゆ^二
さ^二は^一く^二此^一考^二ハ^一極^二楽^一也^二の^一ひ^二流^一と^二す^一
身^二は^一津^二去^一已^二身^一此^二殊^一院^二の^一四^二八^一糸^二を^一
ら^二ん^一の^二り^一や^二く^一ま^二か^一や^二氣^一け^二人^一

か海の船めりるふる小地新くれてむ
報くしこむじ報くいへともも弥院がく
アまくく未法万年此終未法弘にも
持られ十思とりこもんがりと入り
阿の字半方三世乃法弘弥の字六切
乃彌代善薩院の字八方此尋り
けりといひりといれい無量無量無量の切

法と集阿弥院とハ号と也又色玄子
仏現在未來此千仏も三字小網きハ南
無阿弥院仏と一度唱せハ三世の法弘の
は名と念ずり切法と普く所生其施
と深望所くそ又彼舟おとり衆
く貝鐘を生ひらりといふんくふ
あらりらふくとそうくしけ

見國てかりや
やとまきくはる雲は波は舟を
うらめ清風ふ帆と引西方は
らせ路ふを難うりきるさといふれ

わくその森

わくその森の若とゆはく親子
の道よ出よ マキ か換よは者ハ録
倉うめりゆる屋い乃者よてい
去年の暮より都より只今徳
倉へ下つよ サカ 是ハ録倉うら
うやいよ住女よていハ商人を

心入る。去年乃春都へより路ひ
其年の言よ、形下向まへき由作
いさ。此妹返り下をくは旅よ餘小
あふりしめくはへて。又と尋て都へ
よりい^{サレ}実や中よりこの夢世乃
旅よりくつさきよ。又、はくまうぬか
船乃。はかばかとして都路の末も克

星月兼鎌倉山方新夕よ。引て
あふりしめくはへて。又と尋て都へ
よりい^{サレ}実や中よりこの夢世乃
旅よりくつさきよ。又、はくまうぬか
船乃。はかばかとして都路の末も克
生れかて薄か縁しは根さし
あふりしめくはへて。又と尋て都へ
よりい^{サレ}実や中よりこの夢世乃
旅よりくつさきよ。又、はくまうぬか
船乃。はかばかとして都路の末も克
いさ。此妹返り下をくは旅よ餘小
あふりしめくはへて。又と尋て都へ
よりい^{サレ}実や中よりこの夢世乃
旅よりくつさきよ。又、はくまうぬか
船乃。はかばかとして都路の末も克

らまはなふとくこころいへん
あはてあやささくわとありつる
はまは此屋乃まよしてはさまは修
まはみちより凡の念地と作ら
れし津念えまあり何とあへん
かまの旅乃つまよやみちより
凡の念地とてはまはまよと
あまのひては定て旅乃けりま
よてけるし。くまはつまよく念公
易思言まはうまよとてはま
ら自然乃津乃てはまはくあり
いつまは通ひてはまは鎌倉
うらまはの者よてはまは高
人よて津入。去年乃ま都人

くりてとて叶りては行はれ森の所
僧とて貴う人の心入る行はれ志
うと森の洲僧の市人送中さ
やとる 是ハ今夜此宿よと
まりて旅人をして又い宿り
ちりよ徳念の者としてし
てい今よいむすく成ら由中
い歳者るとありやとあり
金乃内へやるまの 是ハ
てい地 是ハ旅人して
い今救世の内は旅人の
く成ら由兼い何くの者として
是其まて 是ハ女性旅人の
い今より凡成地と行ふ

自然乃そめとわけておどろろと
 為ていへし。鎌倉亀うえろや此のあ
 き人の娘とていふ。父ハ去年の暮よ
 京都へはほり。おの杖返津下ろか
 くは箱よ父とそらゆてみやう人
 のほろとりまはれし志を箱をむじ
 く成給ひていふ。若思百あそ子る是
 のいふ 付とくしりへも。其ハ鎌倉
 亀うえろやいふ商人とていふ。去年
 此より都よりなり。其年乃昔よ
 必あ下へき由とりていふ。共。都よ去
 うこき事乃いへし。今あ下い。ね
 息女と持ぬひていふ。式んハ娘と
 一人持ていふ。人よあつけ都へよて

ねはうたう前もなき我子しては
 業はよゆれ世のなほひま
 あり事しあはるるをばまはるる
 公もいなりしをね共ちうひひひ
 よん也 森乃洲僧とりてを
 はとも人まらうとらうり
 ては 言語道断なる若未あひ
 むん。一月又うう。洲かた
 所くおとてりてるふらうて
 ころるる海を 業い いうよ業
 内や。森のが僧乃洲のう業う業
 志ては 洲てはひり 業うさ
 けては 業うさへ海へ 業
 ねけさ思ひもようぬ事とり入て

其事ハ之ハ也ハ又ハ只ハ今ハ事ハ之ハ
乃ハ儀ハ之ハ也ハ是ハ之ハ也ハ其ハ人ハ
の親文ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
所ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
ひ其ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ

乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ
乃ハ是ハ之ハ也ハ乃ハ今ハ夜ハ此ハ

此偈一とせしうや一討及魂香一
そふとりて取物仕て此為こ
ハ高し人乃安と見んとて八月十
五夜にぬあふ月此香とそふ
て必ふも人の安んぬらと
とてたぬぬと人をもと書て及魂と
よりのやと今夜明月よわ

此香とそふらふと山
ハハ有秘や此とた
伏る青 名しすし及魂香の
も烟雲とぬあふも跡力た
と人をも月の夜す
念仏のありも森の松凡
の響き夜の鐘 中秋五

李夫人乃別也。其泉殿。其奈乃
よ。ありき。ぬきまの。みとる。き
う。はらやう。れう。り。て。此。香の。煙と
そ。て。月。の。夜。更。け。月。乃。急。えん。よう
ん。く。と。守。り。き。を。の。が。て。て。ん。よ
う。つ。う。ひ。て。李。夫。人。の。ゆ。う。ち。り。月。の。ふ。み
是。後。り。上。三。五。夜。中。の。新。月。乃。急。えん

の。え。く。由。来。を。て。は。や。う。わ。ん。う。し。き。り
乃。よ。え。月。ひ。き。り。き。よ。は。り。か。ん。り。し。て
皆。感。涙。と。う。か。が。せ。し。君。を。も。と。う。ん
は。所。神。と。押。あ。て。て。な。魂。乃。き。り。り。乃
う。ら。は。ま。き。り。て。せ。ぬ。ん。又。李。夫。人。を
消。く。と。志。く。と。し。は。し。か。有。的。の。み。え
い。く。も。ら。う。け。り。乃。急。えん。乃。急。えん。乃。急。えん

山登りくやと思ひきくもそり
をめしとす時ははだかそりし
切束。身まよひし乃面影と
なるそりし^毒瓜^毒うひを歎きえ
去けし此森の陰の^元くハ人の道と
と城ハあはれとされし^元跡の其名
とあはれし^元森と^元いひやせん^元お

やあはれし^元乃名と^元残と^元森の^元ま^元ま^元ま^元
とめと^元今^元そ^元う^元き^元り^元乃^元房^元燧^元互^元魂^元
喬と^元又^元き^元を^元入^元て^元名^元残^元の^元姿^元に^元入^元
むい^元青^元の^元燧^元乃^元う^元ち^元よ^元あ^元ら^元く^元乃^元燧^元
秋^元よ^元と^元う^元し^元よ^元あ^元ら^元た^元又^元清^元く^元と^元燧^元う^元せ^元て^元
ま^元さ^元し^元く^元思^元ひ^元し^元く^元ひ^元を^元な^元く^元ば^元ぬ^元ま^元あ^元
と^元そ^元乃^元森^元は^元此^元親^元子^元の^元い^元え^元ん^元を^元り

今ノ親子ノ思ハれウリ

獅子

九重^ノ旅衣^ノ心重^ク路^ノよ

久^ク是^レハ都^ノめ^トぬ^カも^ト者^ト

て^ハ我^レ未^ダ丹^後國^クせ^ノん^レ文^殊小

糸^モひ^る今^丹は^ま上^ノか

の^よ都^ノ力^月も^くや^くづ^のみ

末^ヤを^よじ^のは^らの^山寺^余不^レ

見て雲路よをまよふきの海に
おとあり今より元は是しぬ里と志
ら糸乃。溪川はそそをそとや
せのすよまふ小なりく
ては釣船の月力のりやとひ
くさし 夢よりそうつるは夜更ぬる
りの月露とぬるるはまくとた
ぶる力に雲のそそくははにそ
とたふいなふ右に井あつむ白の
早詞 何は是成釣今
さ夏乃のさくは皆文殊乃浄をて
い何とて釣と洲と道い也 付釣
とそれいふ不審成といや 早 不審
小存い 我うま横は右のそんやう

そうきいあうとううこたうと
あひくつ併の津去よそあうん。
家釣とそ何とそせろせろなけ
よいこれそり釣人よ。秋もさうめそ
諸の者。つきて所家よ集めんい
と做行ううん共。今始ての事か
まふ。こたえりゆさをもて

わぬのしきさうくとん
く海上のすくゆ道よし
らんあふ葉とほ
ららうかうのく。岐凡
そそく花とんそらみ
おくよ松原の尻よ
敷池のうりまやの堂よ

一ノコトニ
よきりく ^{ツキ} 小ヤム行し史ヤ

せ共此文殊ハ。柳子ナクなウさ息ハ

ぬウいれも一ウ ^{ツキ} 其夏ナクていそ

じ玉何ナクとくしほし。文殊乃けさつと

じかのウチをナクも。ちナクく去る布

ん志ナクり力付 ^青 せを因と

思ナクあナクしナクく松ナクの葉ナクとナク吹

をナクるナクんナクなナクまナクきナクりナク流ナクのナクいナクはナクいナク

きナクなナクとナク立ナク向ナクらナクさナクみナクとナクれナク。よナクらナクつナクらナクなナク

らナクとナク太ナクのナク尉ナクハナク祚ナクやナク松ナク乃ナク灵ナク身ナクたナクらナク

そナクてナクうナクけナクしナクとナク妙ナクまナクりナクく ^上 獅子

きナクるナクあナクんナクまナクるナクれナクきナクりナクのナクぬナクれナク共ナクみナクく

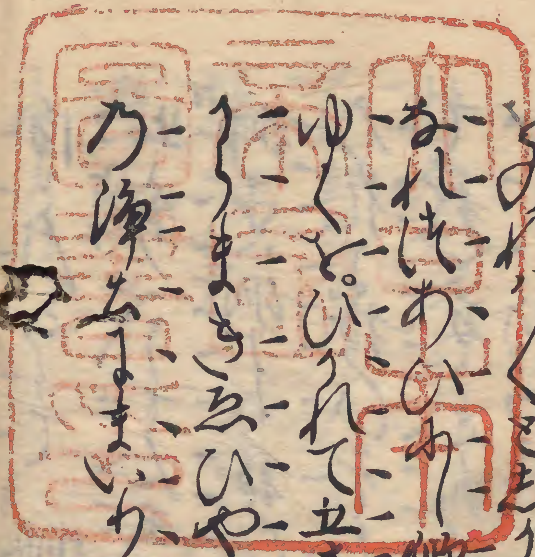
とナクいナクけナクくナクよナクあナクるナクんナクとナクまナクりナク。天ナク下

とナク思ナク連ナクとナクもナクあナクりナク。そナクてナクハ 獅子 天

笑よけのあつらんそぎんがら
こよひのあつてやうくそらけり
牡丹せんそじの花ゆりさき
花をなみのとも思ふはく緑樹
陸之のひして莫ふよのかう
あつてのあつ獅子のけり
あつてのあつ獅子のけり

獅子の洞より出て牡丹拵檀
力花のあつて水よれん
て新なるこみ鏡ゆひは
らるるなり洞より獅子とつ
よくは行ふよれ獅子

一 纏マはシ驚マきヒりシのハらウらシまシ。
一 どのレにシくシまシてシつシ。
一 きれシわシのハしシのハしシのハしシ。
一 ゆシくシいシれシてシまシのハしシのハしシ。
一 一シらシまシもシいシやシらシ入シしてシ文シ殊シ。
一 乃シ海シをシまシいシらシるシ。



此百番者世上流布之板行二百番之外之百番也章句等悉于当流逐吟味令板行者也

御書物師

林和泉様

貞享三年丙寅九月下旬

庫 文 閣 内			
九	二	七	和 書
九	九	九	
九	〇	八	類
架	冊	號	